



いのだと娘は泣く。

お上（先生）の言うことは絶対で、必死になって守る。守らないやつがいたら「非国民！」呼ばわりしてみんなでいじめる。自分たちと違うことをするやつは許さない。戦争に役に立たない（勉強ができない）人はバカにされ、さげすまれる。「学校は軍隊と同じだ」田口恒夫先生がいつもおっしゃってた言葉を思い出す。

学校に行きたがらなくなった娘について私も学校に行ってみた。朝礼のアナウンスを聞いて驚いた。週番（？）の先生がおっしゃる。

「連絡します。明日から手袋をはめてよいことにします」

なんなんだ!? 手袋をはめるかどうかも自分で判断できない子どもを育てているのか？ 日本の学校は!?

休み時間、娘がTちゃんとけんかをする。けんか、おおいにやれ。私は教室の後ろで本を読むふ

りをしている。言葉がするする出ない娘はTちゃんをたたこうとする。からかいながら逃げるTちゃんを、娘は大声でわめきながら追いかける。教室に入ってきたクラスの女の子たちが口々に娘



を注意する。「あきちゃん！ また大声出して！」「教室であばれちゃダメっていつも言うてるでしょ！」「もう！ あきちゃんは！！ お友達をたたいたちゃダメでしょ！」理由も聞かずに、一方的に、頭ごなしに。

「なんなのヨ！ この学校は！！ みんなしてあきちゃんをバカにして！」

家に帰った私は怒り狂った。娘はぼったりと学校に行かなくなった。三年生の十二月だった。

生後八か月で脳腫瘍の手術を受けた娘は発達が遅れた。ひとりでも何とか少し歩けるようになったのが小学校一年生の終わり。学校の勉強にはついていけない。発音が不明瞭で言葉が聞き取りにくい。

だけど、二年生までは娘は喜んで学校に通っていた。九州・福岡県の筑後市という所に住んでいた。「歩けないのに、あんなに一生懸命で。こけ

ても泣かないし。ぼくなんかとてもまねできないよ。あきちゃんはすごい！ とにかくすごい！」みんなから一目置かれていた。制服もない。のびのびした学校だった。

三年生の四月にここ兵庫県に引越して来た。七か月間もよく通ったと思う。制服だって着た。宿題だってしようとしていた。

娘は四年生になった。四年生になってからまだ一日も学校に行っていない。

「お宅のお子さんの小学校が決まりましたのでお知らせします。S養護学校です」

「いいえ。私たちは校区の小学校にやりたいと考えています」

三回の教育委員会との話し合いの結果、校区の小学校の普通学級に入学することになった。でもその時から、いつかこの娘は学校には行かなくなるかもしれないと考えてきた。学校なんか行か

なくてもいい。勉強なんかできなくていい。行きたくなくなったらいつでもやめると言ってきた。

でも本当に学校に行かなくなって娘は大変だった。他にやりたいことがあって学校をやめたわけじゃない。娘はお友達が好きだ。お友達と遊ぶのが一番好きなことなのだ。「学校に行かん子とは遊ばん！」近所の子もしだいに遊びに来なくなる。

「あきはひまー！ 何したらいいの!？」

娘は一日中わめいた。「ひまなら手伝って」「イヤ」「散歩に行こうか」「イヤ」「買い物に行こうか」「イヤ」「じゃ、お留守番してて」「イヤ」

外に出るのをいやがった。庭に出るのもいやがった。おもちゃ買えとわめき、お友達や猫が思い通りに動かないと言って泣き叫んだ。机に向かっていても、洗濯物を干していても、トイレに入っけても「ママー！ ママー！」娘のヒステリックな呼び声に私はどうかかなりそうだった。

それでもなるべくつき合って遊んだ。おもしろそうな絵本や漫画、迷路の本を借りたり買ったりにしてきた。絵本は見向きもしなかった。朝起きると「きょうも一日、あきちゃんのぐずりにつき合わなくちゃいけないのか」ため息が出た。

サラリーマンを辞めてお坊さんになった夫が言った。

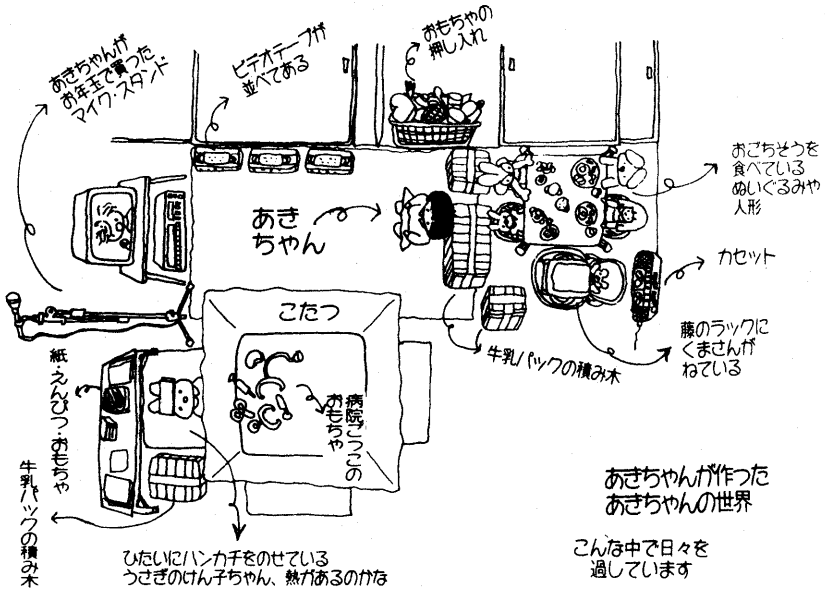
「犠牲になるな。無理してつき合うな。道子が今、自分を犠牲にしてあきとつき合えば、いつかあきも誰かのために自分を犠牲にする日が来るだろう」

そうだ。私たちは娘に望んでいる。誰かのために無理したり自分を犠牲にしたりするのではなく、自分のやりたいことをする人生を送って欲しいと。そして、娘の人生が娘のものであるように私の人生も私のものなのだ。つい忘れてしまう。遊んだりケンカしたりしていたが、ある日疲れに疲れて私は爆発した。もうこの子につき合うの

はいやだ。もうやめた。私が放り出すことで、この子が気が狂おうが、首をくくって死のうが、もう私は知らない。知るもんか。

「ママは遊ばない」私は宣言した。娘は泣いたりわめいたりしていたが、「いいよ、いいよ」とすねて二階へ上がって行った。

十二月に登校拒否を始め、翌三月には娘はすっかり落ち着いた。学校に行っていた頃よりもずっと穏やかになった。ビデオのまわりに牛乳パックで作った積み木・小さな机・椅子・ざぶとん・ぬいぐるみ・人形などを並べて自分の世界を作り始めた。ビデオを見ながら何やらしたり書いたりしているらしい。テレビやビデオを見ながら遊ぶ「ながら族」は私は大嫌い。口うるさく言ってケンカもしたがあきらめた。娘の人生は娘のもの。ビデオ漬けの人生もまたよいのかもしれない。夢中になれることが見つければ、いつかビデオを消す日が来るかもしれない。とりあえず今、娘はこ



▲ 常陽新聞連載「あきちゃんは四年生」より

うしたいのだからこれでいいや、とやっと思えるようになった。

十時、十二時、三時に「おやつ!」「ごはん!」と叫ぶ以外、昼間、娘はほとんどひとりで時間を過ごしている。私は日がな一日、お寺(お寺に住んでいる)の庭の草むしりにはげんでいる。自分のペースで仕事ができるようになって私はとても楽になった。

「九歳の危機」という言葉があると友人が教えてくれた。まさに娘は九歳である。九歳は親離れの大切な一時期なのだとも聞いた。

でも、いくら「九歳の危機」でも、「この子が首をくくって死んでも私は知らん!」なんて大きな子離れを普通の親はしないのだからなあと思う。私たちは母娘ともに過激な性格だ。そして娘が登校拒否を起こしたので、私たち母娘は「九歳の危機」をもろにぶつかり合わなくちゃならな

かったような気がする。

ひとりですく歩けなかったり、娘はひとりできなことがたくさんある。その分私たち母娘はどうしても密着してしまう。だから親離れ、子離れはよけい大変な作業であるようだ。

これから先、お互いに独立するために、いったいいくつかの「危機」を通り越すのだろうか。今さらこの過激な性格は直らない。なるべく肩の力を抜いて、せいぜい、どなり合い、わめき合い、泣いたり笑ったりして、楽しい日々を暮らすとしましょうか。

(はるにれの会)